同窓會報

発　行：東京都立大学
附属高等学校同窓会
〒152-0023 東京都目黒区八雲 1-1-2
発行人：内野滋雄
編　集：同窓会報編集委員会

同窓会今昔

同窓会理事長　内野滋雄（1期）

昭和十九年七月、サイパン島玉砕。当時の佐々木順三校長は朝礼で「戦争は間もなく終るだろう（言葉には日本は負けるという意味が含まれていた）。学問は自由である。諸君は学問に励み、真理を探究せよ」と静かに語られた。日本刀を持ち出す学生はいたが、多くの学生・生徒は静かに聞いていた。真理の探究、自由と自治の伝統は戦争中でも生かされていた。

戦後の学制改革で、旧制の府立高等学校高等科は都立大学に、尋常科は同附属高等学校になった。

昭和二一年に旧制最後の尋常科一年生が入学してきたが、六年後に卒業し、都立大附属高の二期生ということになる。この間昭和二四年には都立大学が設置され、初めて二期生のクラスに女子二〇名が編入し八雲が丘の雰囲気は変わった。大学にも高校にも女子がいる。当時われわれは都立高校附属大学などと呼び、母家を取られた不満を顕にし小競り合いが絶えなかった。

同窓会創立の頃

旧制府立の同窓会はしっかりしたものであったが、新制のわれわれは同窓会を新しくつくらなければならなかった。われわれ一期生が尋常科四年の時、同窓会は必要だから在校中に同窓会費を積みたてようと提案し森脇大五郎校長に頼んだが、なかなか埒が開かない。卒業してしまえば会費はまず集まらないから運営が困難となると言っても暖簾に腕押し。昭和二五年二月に都立大学から来られた第二代の小笠原録雄校長にその事をお願いしたところ「それはいいね。そうでもしなくては会費は集まらないでしょう。それにしても君達の発想はすごいね」と言っていただき、その後学校の事務が毎月同窓会費を月割で集め卒業時にまとめて同窓会に振り込んでもらえるシステムができ、それが今日まで続いていた。故小笠原校長、歴代の事務担当者には感謝してもし切れない。

初代の森脇校長が世界的な遺伝学者であることを知ったのはずっと後のことだった。

学園紛争と同窓会

初代の同窓会理事長には私がなったが、十年程して若手が引き継いだ。その後も同窓会は続いていたようだったが、昭和四二年以降学園紛争の波が全国に拡がり、母校も第一次第二次の学園紛争へとエスカレートしてゆく。校長室、教務室等の封鎖や校舎の封鎖もあって校内は混乱を極めた。その頃、斉正子先生から私の所に電話があり「今の学校は危機的状況で内野さん何とか一度学校へ来て見てちょうだい。同窓会で何とかして欲しいのよ」ということだった。校庭の西隅に建てられた木造校舎が封鎖され、上階に陣取った生徒が下を通るわれわれに水をかけてくる始末。斉先生の目の色が変わっていた。同窓会の活動は全く無くなっていて乱脈を極めていた。

斉先生が言われたことは「紛争は治まるだろうから、同窓会を再建して欲しい」ということだった。これは何とかしなくてはならないと再建することになり、一期から十期ぐらいまでの理事評議員が集まり、斉先生も同席されて再建が始まり今に至っている。しかし、会報を出すことになって、原稿を担当者に送っても会報が出ないし原稿が紛失することもあり、なかなか軌道に乗らない。これも皆が忙しく、働き盛りの人達だったので止むを得ないとは思っている。

同窓会への想いの違い

同窓会は名簿を発行して同窓生の情報を共有することが大切な仕事である。しかし紛争時代の卒業生の中には名簿から削除してくれという人もいた。そういう気持を持つことは、その学校を卒業した履歴は一生消えないのだから不幸なことである。このことについて理事会、評議員会で検討し総会で決議した点は、卒業生名簿という面があるので姓名を削除することはしない。しかし最終学歴、住所、勤務先などの掲載の拒否は個人の自由とすることになった。

最近は四期の野口貞義君のお陰で名簿や会報が順調に出ている。深く感謝するところである。そして十期台の人々が今は中心になり支えてくれている。

後輩桜修館との連繋

平成二三年三月をもって東京都立大学附属高等学校は閉校となり、四月からは東京都立桜修館中等教育学校が一年生から六年生まで八雲が丘のキャンパスを埋めている。今年の記念祭では演劇、展示など高度なもので、才気が感じられる。やはり伝統は生きているし、血は争えないと感ずる。

桜修館の校是は「真理の探究・高い知性・広い視野・強い意思」である。われわれの「真理の探究、自由と自治」と通ずるものがある。初代の石坂康倫校長、二代須藤勝校長、三代小林洋司校長は、府立の良さ、都大附高の良さを強く言っておられ、校旗、校歌、校章を引き継いでいることに誇りを持っておられる。そのため「八雲が丘学友会」をつくって府立、都大附、桜修館の同窓会のゆるやかな連繋をと提案されたがこれが理想的な形といって良いだろう。府立も都大附も異存はなく総会でも承認された。現在、桜修館同窓会は発足しておらずPTAの方が代行の形で学友会の会議には出席されている。府立の同窓会の幕引きも間近である。当分はわれわれの同窓会が中心とならざるを得ない。今年の総会では執行部の若返りが提案され、平成二四年四月に予定されている総会で正式に若返ることになっている。その頃には桜修館も一期生が出る。桜修館の五期生、十期生が出る頃には桜修館同窓会の基盤も固まり「八雲が丘学友会」も変わってくるだろう。第二代の須藤校長と笹副校長が提唱された「八雲が丘文庫」とは、府立と都大附の卒業生が著書を寄贈し、図書館の一角に納められているものをいう。提唱者は桜修館の生徒が自分達の先輩の著書を手に取り、先輩の偉業を励みとすることを狙ったものだが、年々増えるに違いない。同窓会諸氏にはぜひ著書を寄贈していただくようお願いしたい。

終りに

いずれにしても昭和四年に開校した旧制の府立高校が、戦争を境にして変革し今日に至っている。校名は変り、組織も変ったが、校旗・校章・校歌は変らない。そして伝統も脈々と息づいているといってよいだろう。都立大附属高校同窓会も、社会の変動にゆさぶられながらなんとか今日に至っている。府立が消えわれわれが消えても桜修館はつまらない学制改変がなければ残るに違いない。個人の個性や特長を伸ばせるような自由と自治の精神は受け継いでいってもらいたいと願っている。

重要なお知らせがあります。

①臨時総会開催

②会費納入について

6ページを必ずお読みください。

都立大学附属高等学校の伝統を受け継いで

都立桜修館中等教育学校長
小林洋司

本校の教育方針については、本校のホームページにも公開されていますが、「世界の中の日本人としてのアイデンティティをもって、国際社会を担う人材を育成する」となっています。そのために、高い知性、広い視野、強い意志をはぐくむとしています。また、特色ある教育活動として、論理的な思考力や表現力・コミュニケーション能力の育成を図っています。その集大成としては、五千字論文の作成があります。

都立大学附属高等学校は、平成23年3月31日をもって閉校しましたが、校旗、校章、校歌はそのまま受け継がれ、自由と自治についても、自治会が継承しました。三大学校行事であるクラスマッチ、記念祭、合唱祭も引き継ぎで桜修館の行事として定着しています。

最近の状況ですが、記念祭が終了し、一期生は気持ちを切り替えて受験モードに入っています。一期生の進路実現に学校を挙げて取組んでいます。これについては、他の都立中高一貫教育校とともに教育委員会はもとより、広く都民から注目されています。ただ、そうした周囲の動きに気を取られることなく、6年生は日常の授業や受験勉強に全力で取組んでいます。また、5年生以下の各学年の生徒も、毎日の授業や学校行事、部活動にひたむきにいそしんでいます。最近、部活動の活躍が目覚しく、弓道部が関東大会に進出、吹奏楽が前期でAグループ銀賞、後期でAグループ金賞を受賞しました。

最後に、前任の須藤校長先生が提唱された八雲が丘学友会が、発足の運びとなり、同会の定款も関係者の努力で内容が決定しました。府立高等学校、都立大学附属高等学校、そして桜修館中等教育学校の絆がさらに深まることを期待したいと思います。

最後の教員の転出について

都立桜修館中等教育学校　副校長　臼田三知永

一、最後の教員の転出

都大附最後の先生方が、閉校に伴い新天地へと転出なさいました。どの先生も、最後の最後まで都大附と桜修館のためにご尽力くださいました。心より感謝申し上げます。

先生方全員の転出先は次の通りです。定年退職を迎えられた3名の先生方も、引き続き教育活動に携わっております。

なお、桜修館へは3名の先生をお迎えしました。記念祭やクラスマッチ等の行事を始め、都大附の伝統を継承する上でも欠かせない存在となっています。

二、教員の異動状況

1 定年退職（氏名、担当、勤務先）

須藤　勝（統括校長）
清瀬高校（非常勤教員）

越部良一（数学）
三田高校（非常勤教員）

原田　修（美術）
目黒高校（非常勤教員）

2 転出（氏名、担当、勤務先）

笹　のぶえ（副校長）
西高校

平野真規（国語）
立川国際中等教育学校

渡部信綱（世界史）
桜修館中等教育学校

澤田貴啓（数学）
東大和南高校

菊谷和正（数学）
国際高校

須藤博子（数学）
忍岡高校

岩渕寛（化学）
武蔵高校兼
武蔵高校附属中学校

横江直樹（理科実習助手）
国際高校

相原弘明（英語）
田園調布高校

新城菜穂子（英語）
町田高校

竹重聡美（養護）
桜修館中等教育学校

丸井誠一郎（地学・非常勤教員）
桜修館中等教育学校

清水宏美（養護・育休代替）
期間終了

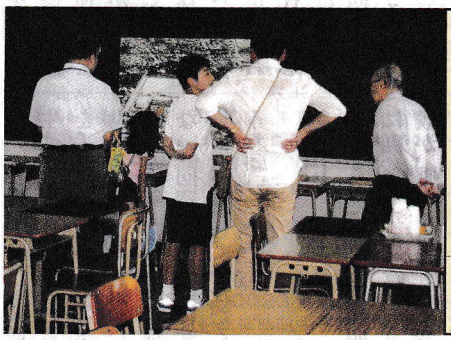
第63期記念祭に「八雲が丘の集い」を出展

残暑は厳しかったが快晴の9月10日（土）11日（日）、母校の記念祭を引継いで開催された桜修館の「第63期記念祭」に、当会は昨年に続き府立高校同窓会との共催で、302講義室に「八雲が丘の集い」を出展しました。

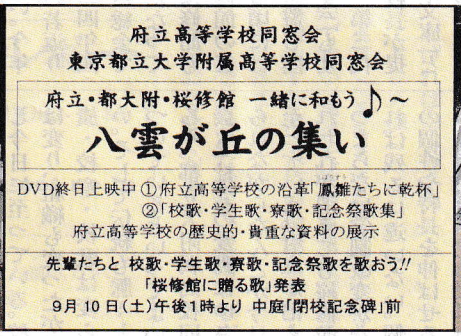
今年はサブタイトルを「桜修館の歴史を知ろう!! 府立・都大附・桜修館 一緒に和もう♪」とし、10日午後1時からは閉校記念碑前で、「先輩たちと校歌・学生歌・寮歌・記念祭歌を歌おう!!」と「桜修館に贈る歌」の発表を行い、当会会員と府立高校同窓会「一士会」のメンバーが熱唱を披露しました。

来年の記念祭の日程と内容は、当会のHPでお知らせします。

閉校記念碑前で校歌を熱唱する「一士会」会員＊



歴史的資料を説明する楠川府立同窓会理事長（右）



府立高等学校同窓会
東京都立大学附属高等学校同窓会

府立・都大附・桜修館　一緒に和もう♪～

八雲が丘の集い

DVD終日上映中 ①府立高等学校の沿革「鳳雛たちに乾杯」
②「校歌・学生歌・寮歌・記念祭歌集」
府立高等学校の歴史的・貴重な資料の展示

先輩たちと 校歌・学生歌・寮歌・記念祭歌を歌おう!!
「桜修館に贈る歌」発表
9月10日（土）午後1時より 中庭「閉校記念碑」前

パンフレットに掲載した広告

今年は立て看板を掲出（右端）＊

＊撮影：根岸之夫

東京都立大学附属高等学校

閉校記念式典・記念碑贈呈式・記念パーティー開催

撮影：根岸之夫（21期）

去る3月31日の母校の閉校に当り、3月5日（土）、最後の卒業式となった「第61回卒業証書授与式」に続き、午前11時45分よりめぐろパーシモンホール大ホールで「閉校記念式典」が、午後1時15分より母校の中庭で「閉校記念碑贈呈式」。引き続きパーシモンホール小ホールで「閉校記念パーティー」が開催されました。

「閉校記念碑贈呈式」では、贈る側から当会内野滋雄理事長の、記念碑建立に際し、会員からの募金と府立高校同窓会からの寄附、作家野上公平氏に対する謝辞に続き、受ける側から須藤 勝校長の謝辞、野上公平氏から記念碑「繁栄」の制作意図についての説明があり、簡素な中にも意義深い贈呈式となりました。

当会とPTAの共催で行なわれた「閉校記念パーティー」では、挨拶・祝辞に続き「青春といふ」を斉唱、石坂康倫前校長の乾杯・歓談の後、母校の歴史を辿るPTA制作のDVDの上映に合わせて、当会会員による「思い出語り」が行われ、最後に校歌を斉唱し、お開きとなりました。

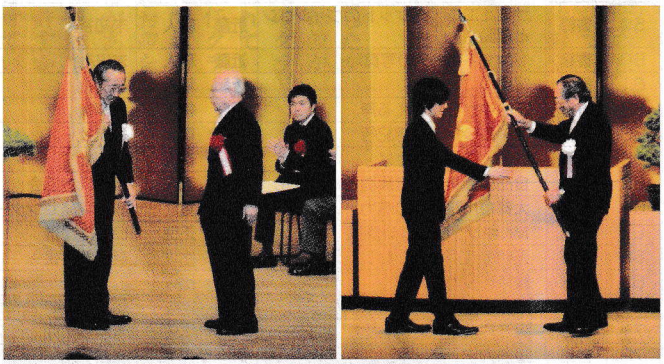
「閉校記念式典」次第（敬称略）

挨　　拶：東京都教育庁 都立学校教育部長 直原　裕
東京都立大学附属高等学校長 須藤　勝
首都大学東京理事長 高橋　宏
府立高等学校同窓会理事長 楠川絢一
東京都立大学附属高等学校同窓会理事長 内野滋雄
東京都立大学附属高等学校第61期生 自治会長 西田幸哉
東京都立桜修館中等教育学校 前自治会長 改田和弘

校旗継承：府立高校→都立大学附属高校→都立桜修館中等教育学校

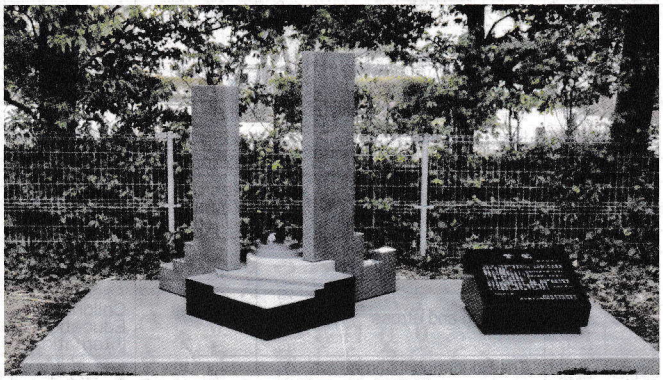
校歌斉唱：指揮：都立大学附属高校3年 関根　環、伴奏：山本祥子

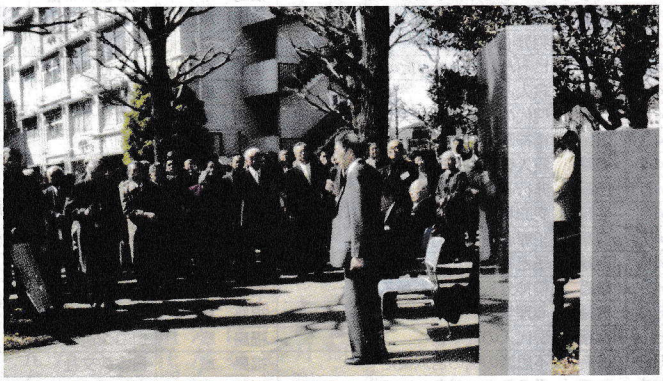
卒業式を終え振袖姿で参加の第61期生を交えた閉校記念式典


[校旗継承] 府立高校同窓会→当会→都立大学附属高校へ

校旗の継承を受けた桜修館第1期生改田和弘さん

閉校記念パーティー「ありがとう都大附の会」で演奏する記念オーケストラ


中庭に建立された閉校記念碑、野上公平・作「繁栄」


贈呈式で制作意図を説明する野上公平氏

「八雲が丘文庫」に図書寄贈のお願い

前号で既報のとおり、母校の閉校にあたり、笹のぶえ副校長先生の提唱により、当会と都立大学附属高等学校、都立大学附属高等学校および都立桜修館中等教育学校の保護者と教職員の会が、「真理の探求」を実現し続けた教育活動の足跡を後世に伝えることを目的とした「八雲が丘文庫」が開設されました。

寄贈された図書は、図書館の一隅に設けられた書架に展示され、桜修館の生徒の利用に供せられていますが、更に文庫の充実を図るため、著書・文献などのご寄贈をお願い申し上げます。

寄贈先：都立桜修館中等教育学校内「八雲が丘文庫」担当
〒152-0023 東京都目黒区八雲1-1-2
電話 03-3723-9966
ファックス 03-3724-7041
＊誠に恐縮ですが送料のご負担をお願いいたします。

また、同窓生、教職員の著書に関する図書目録の送付も受け付けています。その場合は、①書名、②著者名、③発行所名をご記入の上、上記にお送りください。

予算の許す範囲で、図書目録より選定した図書を購入し、「八雲が丘文庫」の蔵書といたします。

問い合わせ先：同窓会事務局
〒158-0084
東京都世田谷区東玉川2-3-15 野口貞義 方
電話・ファックス 03-3720-6007
s-noguchi@ja2.so-net.ne.jp

蔵書はPTAから寄贈された書架に納められている

「八雲が丘文庫」蔵書目録（平成23年9月30日現在）

番号	種別	書名	著者	発行所
1	書籍	中国55の少数民族を訪ねて	市橋　雄二	白水社
2	書籍	開発と援助の政治学	白鳥　正喜	東洋経済新報社
3	書籍	英語の意訳とはなにか	小川　智時	中央公論社
4	CD	中国語通訳トレーニング講座	神崎　多實子	東方書店
5	書籍	夢のあと－続中国酔いがたり	神崎　勇夫	東方書店
6	書籍	情報通信英語	三島　浩	共立出版株式会社
7	書籍	コンピュータ英語ハンドブック	三島　浩	共立出版株式会社
8	書籍	技術者・学生のためのテクニカルライティング	三島　浩	共立出版株式会社
9	書籍	コンピュータ英語活用辞典	三島　浩	オーム社
10	書籍	天才、生い立ちの病跡学	福島　章	講談社文庫
11	書籍	青年期の心	福島　章	講談社現代新書
12	書籍	創造性の深層	福島　章	有斐閣
13	書籍	精神分析の知	福島　章	新書館
14	書籍	歓迎ストレス様御一行	福島　章	NESCO
15	書籍	歓迎ストレス様御一行	福島　章	NESCO
16	書籍	ベートーヴェンの精神分析	福島　章	河合書房新書
17	書籍	犯罪心理学	福島　章	PHP
18	書籍	創造の病	福島　章	新曜社
19	書籍	創造の病	福島　章	新曜社
20	書籍	愛と性と死	福島　章	小学館
21	書籍	働きざかりの過剰適応症候群	福島　章	大和書房
22	書籍	イメージ世代の心を読む	福島　章	新曜社
23	書籍	現代人の攻撃性	福島　章	太陽出版
24	書籍	甘えと反抗の心理	福島　章	日本経済新聞社
25	書籍	グレートマザー	福島　章	ナツメ社
26	書籍	愛の幻想	福島　章	中公新書
27	書籍	彼女は、なぜ人を殺したか	福島　章	講談社文庫
28	書籍	甘えと反抗の心理	福島　章	講談社学術文庫
29	書籍	宮沢賢治	福島　章	講談社学術文庫
30	書籍	覚せい剤犯罪の精神鑑定	福島　章	金剛出版
31	書籍	現代の精神鑑定	福島　章	金子書房
32	書籍	日本の精神鑑定	福島　章	みすず書房
33	書籍	青年期のカルテ	福島　章	新曜社
34	書籍	集客力	福島　章	PHP研究所
35	書籍	精神分析事典	福島　章	新曜社
36	書籍	精神医学の名著５０	福島　章	平凡社
37	書籍	子どもを殺す子どもたち	福島　章	河出書房新書
38	書籍	犯罪心理学研究Ⅰ	福島　章	金剛出版
39	書籍	犯罪心理学研究Ⅱ	福島　章	金剛出版
40	書籍	ヒトハは狩人だった	福島　章	青土社
41	書籍	殺人という病	福島　章	金剛出版
42	書籍	現代のエスプリ　天才の精神病理	福島　章	至文堂
43	書籍	精神医学と社会学	福島　章	金剛出版
44	書籍	殺人者のカルテ	福島　章	清流出版
45	書籍	非行心理学入門	福島　章	中公新書
46	書籍	犯罪精神医学入門	福島　章	中央新書
47	書籍	犯罪心理学入門	福島　章	中公新書
48	書籍	子どもの脳が危ない	福島　章	PHP新書
49	書籍	精神分析で何がわかるか	福島　章	BLUEBACKS
50	書籍	心理学のあゆみ	福島　章	有斐閣新書
51	書籍	現代人の攻撃性	福島　章	ロゴス選書
52	書籍	不思議の国の宮沢賢治	福島　章	日本教文社
53	書籍	見える像と見えない像	近藤　耕人	創樹社
54	書籍	眼と言葉	近藤　耕人	創樹社
55	書籍	映像と言語	近藤　耕人	紀伊国屋書店
56	書籍	さまよえる人たち	近藤　耕人	彩流社
57	書籍	写真との対話	近藤　耕人	国書刊行会
58	書籍	ミメーシスを越えて	近藤　耕人	水声社
59	書籍	サミュエル・ベケットのヴィジョンと運動	近藤　耕人	未知谷
60	書籍	ドン・キホーテの写真	近藤　耕人	未来社
61	書籍	写真論	近藤　耕人	晶文社
62	書籍	石の中から聞こえる声	近藤　耕人	水声社
63	書籍	アイルランド幻想紀行	近藤　耕人	彩流社
64	書籍	映像・肉体・ことば	近藤　耕人	彩流社
65	書籍	食品製造業の経営展開と構造変化	野島　直人	農林統計協会
66	書籍	大警視川路利良の魅力	久野　猛	教育実務センター
67	書籍	Mr.キングスの珈琲講座	衛藤　正徳	いなほ書房
68	書籍	天明の江戸打ちこわし	片倉　比佐子	新日本新書
69	書籍	東京市役所の青春	片倉　比佐子	
70	書籍	江戸の土地問題	片倉　比佐子	同成社
71	書籍	大江戸八百八町町名主	片倉　比佐子	吉川弘文館
72	書籍	量子力学	原　康夫	岩波書店
73	書籍	物理はこんなに面白い	原　康夫	日本経済新聞社
74	書籍	物理学	原　康夫	学術図書出版社
75	書籍	現代物理学	原　康夫	裳華房
76	書籍	物理学基礎	原　康夫	学術図書出版社
77	書籍	ファインマン計算機科学	原　康夫	岩波書店
78	書籍	量子の不思議	原　康夫	中公新書
79	書籍	電磁気学Ⅰ	原　康夫	裳華房
80	書籍	電磁気学Ⅱ	原　康夫	裳華房
81	書籍	素粒子物理学	原　康夫	裳華房
82	書籍	人体解剖学アトラス	内野滋雄	西村書店
83	書籍	狂いだすのは三月	松崎陽平	河出書房新社
84	書籍	愉快に日比谷高校	久野　猛	日本加除出版株式会社
85	書籍	邪馬台国大研究	井上筑前	梓書院
86	書籍	原子力は何が問題か	傍島眞	ERC出版
87～97	会報	風の中へ 創刊号～第11号	大阪・本町「歴史倶楽部」	
98	書籍	よーするに医学えほん おなか編	川田秀文	講談社
99	書籍	よーするに医学えほん けが編	川田秀文	講談社
100	書籍	よーするに医学えほん インフルンザ編	川田秀文	講談社
101	書籍	落語大好き	松原　良	日本図書刊行会
102	書籍	創立10周年記念事業 会員が選ぶ東京新百景	江戸東京博物館友の会	江戸東京博物館友の会
103	書籍	日常の疑問を物理で解き明かす	原康夫・右近修治	ソフトバンククリエイティブ
104	書籍	地割の歴史地理学的研究	柴田孝夫	古今書院
105	書籍	松岡大和	松岡大和	印刷　株式会社文祥堂
106	書籍	TOO CLEVER FOR OUR OWN GOOD	Kaoru Yamamoto（山本薫）	UNIVERSITY PRESS OF AMERICA,INC
107	書籍	Their　World, Our World	〃　〃	Praeger Publishers
108	書籍	Chrldren and atress	〃　〃	Association for Childhood Education International
109	書籍	The Educational Forum (Summer 1992)	〃　〃	KAPPA DELTA PI
110	原稿集	THE LIFE OF THE MIND	〃　〃	

校歌等の継承にあたり、変更・改訂の決定事項について

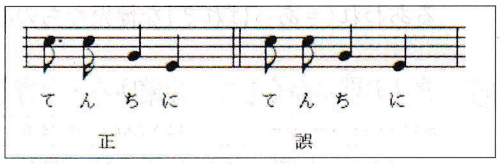
前田 高史（14期）

2011年5月19日、桜修館中等教育学校校長室においてなされた会議において、
下記事項が確認され、継承されることが決まりました。

出席者：都立桜修館中等教育学校：臼田三知永副校長、大関　英先生（音楽担当）
府立高等学校同窓会：楠川絢一理事長、山田早苗（一土会代表）、吉松安弘
都立大学附属高等学校同窓会：野口貞義（４期・同窓会事務係）、前田高史（14期・音楽智識研究会）

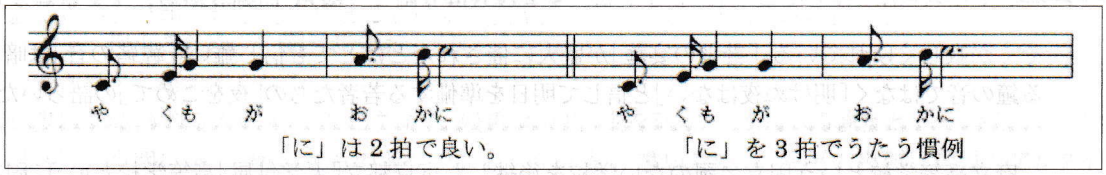
1　校歌を伝承するに当たり歌詞と曲の統一

1 「八雲」については「やくも」と発音する。
2011年に閉校記念発売のDVDにおいて、字幕が「やぐも」
となっているのは誤り。



2 一番の歌詞で説明すると、「生気天地に…」の「天地」の部分は、
符点八分音符と十六分音符が正しい。

3 一番の歌詞、最後の節。「八雲(やくも)が丘に」の部分。
府立高校は、二分音符を符点にして歌う習慣があったが、これは譜面の通りで良い。



4 二番の歌詞、「崇高き」は「たかき」と歌う。

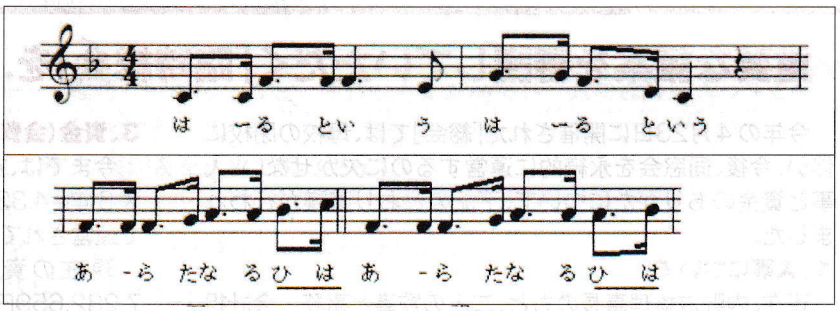
5 三番の歌詞、最後の節。「我等が使命」が正。「我らの使命」は誤り。

2　学生歌「青春(はる)といふ」の伝承について

6 歌い出し。「青春といふ　青春といふ」
一土会バージョンを正とする。

7 「新たなる日は」の下線部分の音が違う。

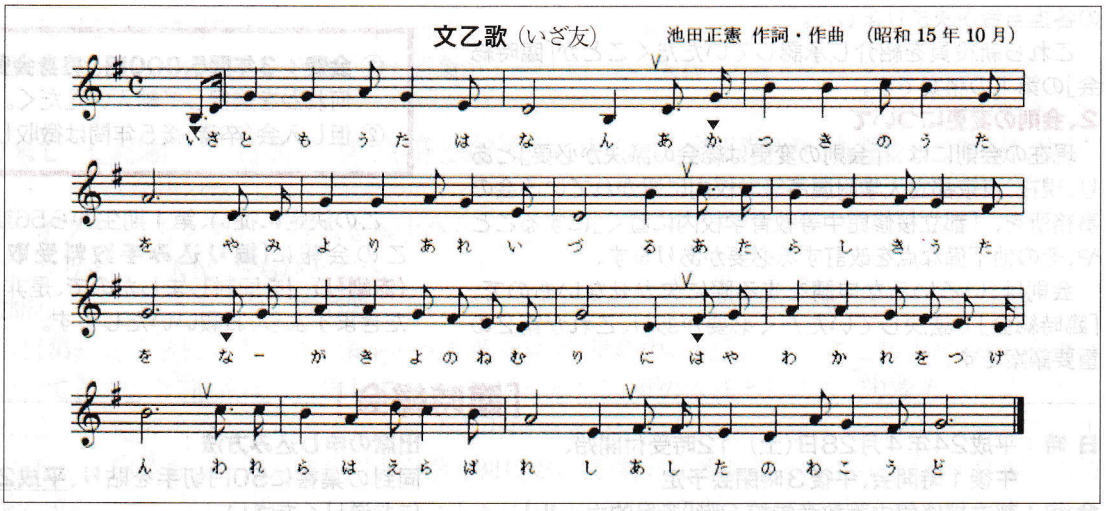
8 最後の節、「我等が府立　若人府立」を「我等が都立　若人都立」と新制で歌っていたのは、「我等が誇り　若人桜修館」に改めることで伝承していただくことになりました。



3　文乙歌（いざ友）について

会議では取り上げられませんでしたが、今後も歌い継がれるであろう名歌の一つである、文乙歌について、この紙面をお借りして、正調の楽譜を資料として紹介させて頂きます。

右記譜面にて「▼」マークの付いた音が伝承歌と違う部分です。



以上、確認事項を整理しました。この内容に基づき桜修館において継承される事が確認できたことは、都立の一卒業生として大変嬉しく思いました。それから音楽の大関先生に、新制記念祭歌にも歌い継いで頂きたい良い歌があることをお話しておきました。

4 **見よ戎羯は跳梁りて　兵燹鳳城焼す秋　征驂馳せて鸞纛に　あはれ護国の鯨波捲く　健児が悲願誰か知る**

ミヨジューケツハ ハビコリテ　ヘイセイホージョー ケガストキ　セイサンハセテ ラントーニ　アワレゴコクノ ゲイハマク　ケンジガヒガン タレカシル

05-0005　戎羯　ジュウケツ　戎は西方のえびす。羯は匈奴の別種で五胡の一。

02-0085　兵燹　ヘイセン　戦争のために起こる火事。燹は野火。

12-0790　鳳城　ホウジョウ　長安。帝都を言う。

04-0817　征驂　セイサン　遠くに行く車馬。驂はそえうま。

12-0890　鸞纛　ラントウ　天子の用いる大きな旗。

12-0754　鯨波　ゲイハ　衆人一斉に上げる聲。鬨の声。

米軍の空襲ははげしくなり、首都東京が兵火のさなかにあるとき、はるか国土を離れて「皇軍」の旗の下に戦っているあわれ(＝あっぱれ？)な健児たちの心中はいかばかりであろうか。

5 **北斗の啓示高くして　短檠ゆるゝ今宵しも　挙ぐや警世の宴莚　八雲ヶ丘に鳴り出づる　鞺鞳の音聴かざるや**

ホクトノサトシ タカクシテ　タンケイユルル コヨイシモ　アグヤケイセノ ウタムシロ　ヤクモガオカニ ナリイズル　トートーノオト キカザルヤ

08-0290　短檠　タンケイ　短い燭台。

12-0177　鞺鞳　トウトウ　鐘の音、瀧の音。

こちらは、別天地の八雲が丘。北斗七星は天空高く変わることなく北を指し示しているが地上は灯火管制でろうそくが寂しくゆれている。「警世の宴莚」が盛大に催されたとはとても信じ難い。「鞺鞳の音」は暗い夜闇に吸い込まれる鐘の音ではなく「明けぬ夜はない」と信じて明日を準備する若者たちの「夜をこめて」の語らいだったと信じたい。

府立高等学校という固有名詞のない学校を後継した東京都立「大学付属」高等学校という、固有名詞のない学校が消えるにあたってみんなで難しい歌を歌った日の記憶のために。

＊諸橋轍次「大漢和辞典」による。(数字は巻ーページ)

重要な議案を審議していただく「臨時総会」を、来年4月28日(土)に開催

今年の４月23日に開催された「総会」では、母校の閉校に伴い、今後、同窓会を永続的に運営するのに欠かせない、人事と資金のありかたについて、下記のとおり審議が行われました。

1、人事について

現在、内野滋雄理事長のもと、二人の監事と事務・会計担当者で会が運営されていますが、今後永続的に会を運営するには“人事の若返りが必要”との観点から、去る11月26日開催の「平成23年度上期理事・監事・評議員会議」で、理事長、逝去された鮟目(えのめ)監事に代わる監事、会計、事務の各担当者が決まりました。

これら新役員を紹介し承認していただくことが「臨時総会」の第１の議案です。

2、会則の変更について

現在の会則には、「会則の変更は総会の議決が必要」とあり、現在、東京都立大学附属高等学校内に置かれている会の事務所を、「都立桜修館中等教育学校内に置く」にすることや、その他不備な点を改訂する必要があります。

会則は、いろいろな申請をする際に欠かせないもので、「臨時総会」で議決していただく必要があり、これが第２の重要議案です。

3、資金(会費納入)について

今までは、在学中に積み立てた会費(月120円×12ヶ月×３年=4,320円×入会者数)と、わずかな利息などの収入で運営されてきました。

現在の資産は10ページの『収支計算書』のとおり7,282,659円ですが、来年からは入会者がありませんので、この資産は約３年でゼロとなり、会の運営が出来なくなります。

そこで、今後は“会費”を下記のとおり納入していただくことが決まりました。

① **会費：３年間5,000円、終身会費：30,000円** の何れかを選択して納入いただく。

② 但し入会(卒業)後５年間は徴収しない。

この決定に従い、第１期生から56期生までの会員には、この会報に **「振り込み手数料受取人払いの振替用紙(赤刷り)」** を同封しましたので、是非ともお振り込みいただきますよう、お願いいたします。

「臨時総会」

日 時：平成24年４月28日(土)　12時受付開始、午後１時開会、午後３時閉会予定

会 場：都立桜修館中等教育学校 2階「多目的ホール」

議 題：① 新役員(理事長、監事、会計、事務)紹介・承認、② 会則の変更、③ その他

出席の申し込み方法：

同封の葉書に50円切手を貼り、**平成24年４月15日**までにお送りください。

＊切手代の50円はお立て替えいただき、臨時総会の際現金でお返しします。

私の読んだ第八寮歌「春残更に」の情景

須田大春（8期）

1 春残更に銀城の　暁鐘窈冥に谺せば　聲なき聲は拡ごりて　不羈卓犖の若人は　永劫の生命に夢覚めぬ

ハルザンコーニ ギンジョーノ　カネヨーメーニ コダマセバ　コエナキコエワ ヒロゴリテ　フキタクラクノ ワコオドワ　トワノイノチニ ユメサメヌ

06-0752　残更　ザンコウ　残りの夜(午前4時ごろ)
11-0525　銀城　ギンジョウ　中国の県名？？？
—　暁鐘　ギョウショウ　夜明けの鐘
08-0661　窈冥　ヨウメイ　奥深く暗い。奥深くて測り知れぬさま
01-0236　不羈　フキ　拘束されぬ。　羈は馬のおもがい、たづな。
02-0557　卓犖　タクラク　超えすぐれる

春の夜明け前。銀城の暁鐘の音が暗闇にこだまする。残更は五更。夜を5つに区分して5番目というから午前3時から5時の間か。藤村は「夜明け前」で明治維新の前夜を維新の50年後に書いたが、春残更の夜明け前はリアルタイムで書かれた敗戦前夜である。暗闇に吸い取られかすかに聞こえた暁鐘の音に、「不羈卓犖」の若人が永劫の命に夢醒める。東京高校が尋常科の募集を停止して以来、都内に比類無い受験最難関校となった都立高校の生徒は、自らを卓犖(＝超越的に優れている)といって恥じるところが無かった。不羈(＝くつわをはめられない野生馬)の伝統は、卓犖とはとてもいえないわれわれ新制の世代にも受け継がれている。

2 嚶鳴の友真帆挙げて　引くや真理の澪標　轗軻の嗟嘆深くとも　斗筲の人と云ふ勿れ　大声俚耳に入らずとぞ

オーメイノトモ マホアゲテ　ヒクヤシンリノ ミオジルシ　カンカノナゲキ フカクトモ　トソーノヒトト ユーナカレ　タイセイリジニ イラズトゾ

02-1182　嚶鳴　オウメイ　鳥が相和して鳴く。鳥が友を求めて鳴くさま。
08-0197　真帆　マホ　順風に孕んだ帆
07-0297　澪標　ミオジルシ(ミオツクシ)　水路を示すために水中に打った杭
10-1066　轗軻　カンカ　車の進みがたいこと。志をえないさま。
02-1122　嗟嘆　ナゲキ　なげく。嘆きたたえる。
02-1122　斗筲之人　トソウノヒト(トショウノヒト)　器量が小さくつまらぬ人物
03-0367　大声不入於里耳　タイセイリジニイラズ　高尚な言論・高雅な音楽は俗人には解せられない

永劫の命に目覚めた「不羈卓犖」の若人たちは、真理の道をまっしぐらに進もうとするが、真帆どころではない逆風で前に進むことが出来ない。「轗軻の嗟嘆」＝時の世に受け入れられないと嘆くとしても、「斗筲之人」＝役に立たないつまらぬ人間と評価してもらっては困る。真理を説く言葉がミーハーに受け入れられないのは、いつものことだ。

3 さはれ戦雰迫り来て　道義地に墜つ真中に　世の木鐸と衿持負ふ　我ら起たずば蒼生の　如法闇夜を如何にせむ

サワレセンフン セマリキテ　ドーギチニオツ タダナカニ　ヨノボクタクト ホコリオウ　ワレラタタズバ ソーセイノ　ニョホウアンヤラ イカニセン

06-0001　木鐸　ボクタク(モクタク)　文教を施すひと
09-0835　蒼生　ソウセイ　人民。あおひとぐさ。
03-0635　如法暗夜　ニョホウアンヤ　真の闇

とはいっても、(第一高等学校のように)「栄華の巷を低く見て」世の中に超然とすることは出来ない。戦争はすぐそばまで迫ってきており、道義は地に墜ちている。このときこそ、世の木鐸としての誇りをもった我らが立ち上がらなければ、真っ暗闇のなかにいる人民を救うことはできないのだ。戦後の学生運動のアジ演説そのままである。学生運動の先駆性をとなえた武井昭夫全学連初代委員長(輝ける委員長と呼ばれた)らが日本で最初の高校自治会を八雲が丘に設立したのは、このたった4ヵ月後1945年10月25日である。「砂川」の全学連書記長高野秀夫も、60年ブント書記長の島成郎もそこにいた。

懐かしの恩師

驚くべき自由と自治

喜多迅鷹（きたとしたか）先生
（昭和25年～45年在職・社会）

都大附高の「自由と自治」についての、信じられないような話をします。

1953（昭和28）年、第4期生がやがて最終学年を迎えようとする3月、関西修学旅行が行われました。生徒3クラス約150名、付添教官は、斎、宮下、喜多の各担任に小笠原録雄校長。このとき実は教員は誰も修学旅行の下見には行きませんでした。こんなことは誰も信じられないでしょう。教育委員会が知ったら腰を抜かしたかもしれませんが、事実です。

代わりに生徒が行きました。昭和28年という時代もあったでしょうが、何より生徒中心の行事は、生徒が自由に自主的に企画し、運営するのが当然という旧制高校以来の伝統があったからだと思います。鉄道に並々ならぬ関心と造詣を持つ17歳の二人の生徒が欠席届を出し、学校の授業そっちのけで意欲満々下見を果たし、帰校後報告しました。「先生たちには一本ずつ付けるように手配してきました」と！「うーん、でかした」とは言いませんでしたが、教員たちも、こんな生徒に引率されて、いそいそと修学旅行に出かけたのでした。この生徒とは誰あろう、この会報の編集委員の一人、野口貞義君なのです。＊

そして第一日目、京都でのこと。お決まりの見学を終えた後の自由時間、校長と私たち教員は、とあるお好み焼き屋に入りました。そこでしばらく飲んでいるうちに、校長さんはすっかりいい気分になって、食べもしないのにむやみにお好み焼きを注文し、何か口ずさみながら、楽しそうに作り続けていました。やがて僕と宮下さんは、お好み焼き屋に校長さんを託して、さらに京都の町をほっつき歩きました。射的屋にも入り、射的屋の親父に「もうやめてくれ」と泣きつかれたほど、百発百中でした。もうそろそろ就寝時間だ、戻ろう。旅館の前まで来ると二人は気を取り直し、酔態を曝してはまずいと、威儀を正し、「歩調取れ！

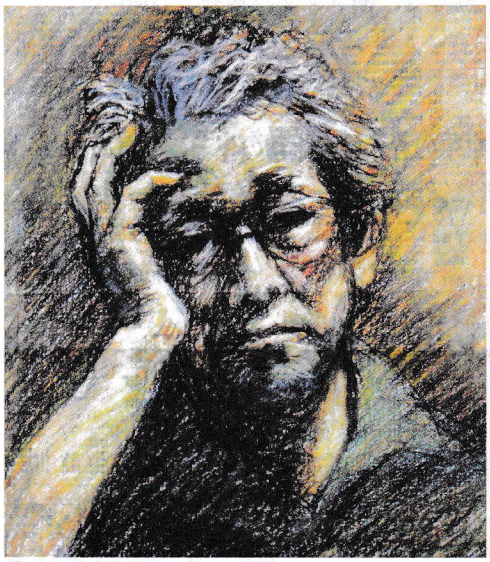
イッチ、ニッ、イッチ、ニッ」と（やっぱり酔っていたのですね）玄関に入って行きました。

「兵隊ゴッコをしてる場合じゃありませんよ！早く上がって、上に行って御覧なさい！」玄関に立っていたのは斎先生。2階の広間では、なんと緊急臨時生徒大会が開かれていたのです。生徒大会でも何でも、自分たちが必要と思ったら、学校とは関係なしに、どこででも彼らは勝手に開くのです。自由な意思で、自主的に！よく事態が飲み込めないまま、赤い顔でさすがに決まり悪く座っていると、すぐさまもっとひどい事態が展開しました。「なんだ、なんだ」と言いながら、いいご機嫌の不良校長が、どこでどう合流したのか、小中陽太郎君など数名の不良学生たちを引き連れて、賑々しくご帰館になったのです！

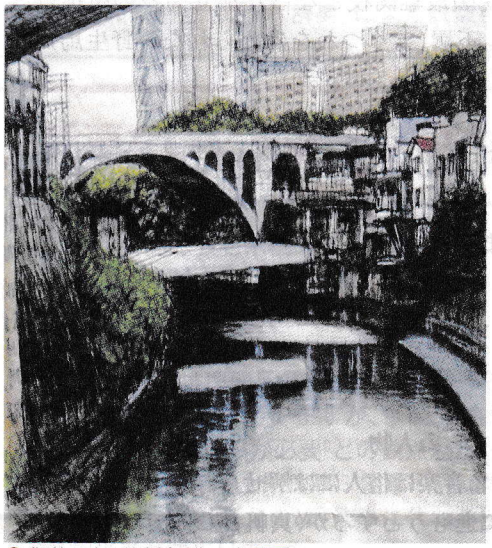
翌日になってようやく私にははっきりしたのですが、修学旅行の引率教官（実態は被引率教官）たちが、事もあろうに学校行事実施中に飲酒酩酊したこと、それに加えて、件の不良学生たちが、断りなしに意図的に女子生徒たちの部屋を開けた、ということにありました。後者については、私は翌日斎先生に聞いて初めて知り、「それはただの悪ふざけですよ」と言って、「その悪ふざけがいけません！」と、斎先生にこっぴどく叱られました。先生の言うとおりで、それはいけません。私はこれについてはこれ以上知らないので、当事者の小中君にでも説明してもらうことにして、無責任な論評は控えます。自由と自治の往年の学校の雰囲気がだんだん明らかになってきたと思いますが、最後に掉尾の一振とも言うべき出来事を一つ。

それは帰る日、京都駅で団体修学旅行列車を待っていたときのこと。例によって、並ぶことにかけては小学生にも劣る我が校の列の隣りに、きちんと整列した、名前は忘れましたが、どこかの高校の生徒たちがいました。教師たちは、「うちの生徒たちも、もう少し何とかならないもんかね」などとささやいていました。ところが乗車時刻が迫ってきて、団体改札口近くに駅員の姿が現れるや、きちんと整列していた他校の生徒たちが、算を乱して、我が校の列の間をかいくぐり、改札口目指して我先にと殺到したのです。我が生徒たちはと言えば、相変わらずぐちゃぐちゃの列のまま一歩も動かず、何事かとただぽかんと眺めているだけ。他校の先生たちは大慌てで、改札口の柵に跳び上がり、声を限りに叫びました。「おーい、××校の生徒たちは後ろに下がれー！元の位置に戻れー！」

自由と自治の根底には、どんな状況の中でも明確な自分の意志でしか動かない、付和雷同することのない確かな個人があったのです。自由と自治を絵に描いたような修学旅行でした。



① 自画像（新聞紙にパステル画）

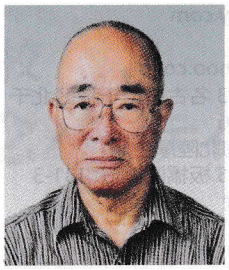


② 御茶ノ水・聖橋（近作：水彩画）

＊編集者註：田中誠一郎と野口

都高（都大附）と私

久野　猛先生
（昭和40年～60年在職・地学）



私は、昭和四十年四月から六十年三月まで、ちょうど二十年間、主に一学年全クラスの地学と三学年の受験用選択科目の地学の授業を担任していました。

旧制の七年制高校時代は別として、昭和二十三年から平成二十三年まで六十年余を数える新制都高史の中間、ほぼ三分の一にあたる時期に在職していたことになります。ちなみに、私の高校教諭歴はこれが全てです。

昭和四十一年度の学校群制度騒ぎのときは、まだ駆出し二年目の新米でして、校長の小場瀬卓三教授が校長会や教育委員会での協議から持ちかえられる第二学区学校群の組み合せ案が二転三転し、斎正子先生など先輩が、それを承服できずに口角沫を飛ばして激論を交わされるのを、物珍しそうに眺めていました。

その年入学の、単独選抜最後の学年（十九期）で、初めて担任をさせていただきましたが、この三年間の途中から政治運動が激化、それが都高にも持ち込まれるようになり、昭和四十年三月の卒業式は中止せざるをえない事態になりました。

私自身、卒業式実施の担任側の係として喜多迅鷹先生にくっついて、式前日の夕方まで自治会代表と式次第などを話し合っていましたので、一夜明けて、校舎の一部が卒業式粉砕を叫ぶ生徒諸君によって封鎖されているのが判明、卒業式は中止と決まったとき、なんとも言えない虚しさを覚えたものでした。これが、学園紛争の始まりです。

都高は、以後しばらく、学校群っ子と称すべき新型の生徒に目を奪われ、かつ学園紛争の拡大に怯えながら、いかに日々の授業を行うか、苦心することになります。

あげくに、都高教育のなかから教養主義的な価値が抜き捨てられ、大学受験対策に直結する価値だけが、必要不可欠なものとして生き残るような風潮が強まったと思います。つまり受験科目としてマイナーな地学の担当はきわめて厳しい時代が続いたと、自分の授業の拙さは棚に上げて、かなり愚痴っぽく、私はそう思っています。

情けない話ですが、そんな私を助けてくれたのは、顧問をつとめた水泳部、野球部、天文気象部、文芸部などの部活動や、夏山登山や雪山スキーでの生徒諸君との付き合いでした。

楽しかったですねえ。ただ、私はいずれについても生徒に教えるほどの技術や経験を持ち合わせていませんで、ひたすら、生徒と一緒に夢中で何かをやっていただけのこと、いま思い出しても赤面の至りです。

七十四歳になりましたが元気にしています。母校が閉校！の昨今、各期のクラス会がさかんに行われているようです。私も担任クラスだけでなく、担任ではなかったクラスからもお声を掛けていただくことがあります。お祝儀はあまりはずめませんが、都合の許すかぎり、喜んで参加させていただいています。よろしければ、どうぞ一声お掛けください。

定年退職

越部良一先生
（平成16年～23年在職・数学）

『嘆くまじ　ボケにかすむ目　痛む腰　ぬける歯すべて　長寿の証』寂しい歌ですが、実際、あっちが変だ、こっちが痛いと医者に行くと「順調な老化です」と言われ、ほっとはするものの複雑な心境です。

そんな私が最後の担任をお引き受けするには相当な覚悟が必要でした。皆さん、何食わぬ顔で退職されますが、実は一人一人に一つ一つのドラマがあるのです。母校に勤務したことのある私は教わった先生方が順に退職されるお姿を見せていただき、本当に大変なんだなと実感しました。特に、最後の一年は特別なものがあります。その一年が三年の担任となれば、調査書をはじめ外へ出す書類が多く、場合によっては生徒の一生を左右しかねません。「もの忘れ、大丈夫かな？」

背中を押してくれたのは生徒の優しさでした。担任をしていた五十八期や顧問をしていたサッカー部は勿論ですが、名前を知らない生徒も含めて都大附の生徒は優しく暖かい。ここの生徒達と一緒にこの学校を卒業したい。そして出来る事なら都大附の良さを桜修館にバトンタッチする一助となりたい。

最後の学年としてスタートした六十一期でしたが、すべてのことが始めてのことばかりでした。入学すれば2年生、3年生の先輩がいるのは当たり前ですが、彼らには2年生、3年生の後輩もいました。ただし、学校は別なので留年すれば即、退学です。エッ？？…

生徒たちは事ある毎に絆を深めていきました。それは教員も同じで、担任団を始め一つにまとまっていきました。

都大附と桜修館の距離を縮めてくれたのは部活動であり、行事でした。同じ目標に向かって、同じ困難をともに乗り越える中で少しずつ、近づいていったのです。2校合体の変則チームでのエントリーは、競技種目によって扱いが異なり、それぞれに苦労しました。しかし、試合が始まってしまえば同じです。先輩も後輩もない。それこそチームが一つになった瞬間です。また、桜修館の一期生が記念祭の開催で、第六十二回と冠をつけてくれました。本当に嬉しかったです。これで繋がった。それ以来、桜修館が大好きになりました。

この三月、大好きな都大附を見送り、桜修館との別れを告げると四月からは、非常勤講師として都立三田高校でお世話になっています。自分で望んだものの部活動がない、担任が無いというのは妙に居心地が悪く知らずにお腹をさすっている自分がいました。そんなとき、友人から五木寛之の林（りん）住期（じゅうきを薦められました。人生を四つに分けて「学習期（がくしゅうき）」「家（か）住期（じゅうき）」「林（りん）住期（じゅうき）」「遊行期（ゆぎょうき）」。それぞれ二十五年ずつをあて、心身を鍛え、しっかり学習する。家庭を持ち、社会貢献する。野に出て、自らの生き甲斐を求める。上手に幕を下ろす。つまり、林住期こそジャンプだと。

卒業生には巣立ちに当たり「思い切り翼を拡げ、勇気を持って翔べ」とエールを送ってきた私ですが、六十にして、飛び出す勇気があるでしょうか？

Good Luck！

写真は都大附の卒業生が桜修館で教育実習をさせていただいた折、授業を観せてもらいに行ったときのもので、撮影して下さったのは養護の竹重先生。一緒に写っているのは桜修館の生徒達です。

盛んな 同期会・クラス会・同好会レポート

第7期同期会

日　時：平成23年11月10日(木)
会　場：南青山「NHK青山荘」
参加者：60名

古希の会から3年ぶりの開催でした。参加者は前回より18名減でちょっと寂しい感じがしましたが、それでも料理とお酒が入るにつれてあちらこちらで歓談の熱は上がるばかり。クラス毎の写真撮影をはさんで4時間近く、話は尽きないようでした。

ホワイトボードには吉田夏生君撮影の桜修館周辺の近況写真20数点を展示。この半世紀の変貌ぶりに感慨もひとしお。また去年完成したDVD「歌集」をエンドレスに再生し会場を盛り上げました。

会も終わりに近付くころ、さて次回はということになり、喜寿には遠すぎるし、また2年後の後期高齢者も気色が悪いということで幹事団にまかせることにしました。

（田中克己・記）

都附高十一期会 2011

日　時：平成23年5月28日(土)
　　午後1時半より
会　場：自由が丘の人気イタリアン「カーサ・ジャルディーノ」
参加者：62名

卒業後50年、母校閉校の節目に、卒業生151名中、逝去者、連絡先不明を除く126名に案内状発送。三日後に大震災。開催を迷うも機会があれば少しでも前進したいと予定通り開催。

前日に梅雨入り。大型台風が沖縄を窺う生憎の雨模様にも拘らず、遠くは米国、札幌、京都、神戸からの参加者もあって、大いに旧交を温めました。

なお、母校を懐かしむ便として「都附高賛歌」を作り、欠席者にも配布しました。

（山本英昌・記）

第26期 E組クラス会

日　時：平成23年10月30日(土)
　　午後7時30分～10時30分
会　場：新宿「ケンズカフェ東京」
参加者：32名

卒業後35年目、第1回クラス会を、ついに開催しました。

当日は台風14号の関東接近により、大変な悪天候の中、全国各地からたくさんのクラスメートが集まってくれました。

担任の浅羽先生は、残念ながらご都合により欠席でしたが、地学の久野先生、英語の加藤先生をお招きし、当時の写真のスライドショーをバックに、一人ずつ近況報告をし、3時間は、あっという間でした。

時間が足りず、半分近くの人たちが2次会、3次会へと流れていきました。

（広田〈山内〉淳子・記）

機研OB・OG懇親会

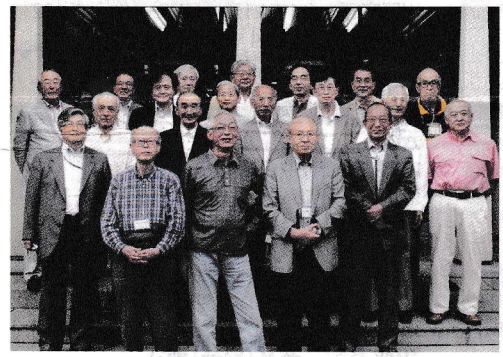
日　時：平成23年10月15日(土)
　　12時30分より
会　場：市谷「プオーノ」
参加者：19名

毎年〝鉄道記念日〟直近の土曜日に開催する、機械技術研究会（略称機研）のOB・OGの懇親会を、今年も表記のとおり開催。

遠くブラジルから参加の鈴木健太郎さん（3期）を交えた1期から22期の20名が、近況や研究成果を語り、工夫を凝らした鉄道模型の展示・運転や資料の公開・配布、DVDの上映など、例年に増して充実した懇親会となりました。

●来年も10月13日(土)、同時刻に同じ会場で開催

（野口貞義・記）



ホームページ開設

北原久利（18期・HP開設委員長）

かねてから懸案であった同窓会のホームページが開設されました。

どのようなコンセプトにするか、どの程度の費用をかけるのか等々の議論があり、時間がかかってしまいましたが、取り敢えずこのような形で開設しました。

まだまだ試行錯誤を繰り返しており、皆さんのご意見で育てていただければ幸いです。

アドレスは、http://www.yagumokai.org/ですが、都立大学附属高校同窓会で検索すれば、大体の検索エンジンで出てきます。

一度ご覧いただき、是非ともご意見をお寄せください。

同期会、クラス会、同好会レポート

原稿締切日：平成24年9月30日
原稿の送り先：〒158-0084 東京都世田谷区東玉川2-3-15
野口貞義 方 同窓会報編集室
Fax: 03-3720-6007
E-mail:s-noguchi@ja2.s-net.ne.jp

原稿募集

同窓会への連絡は

住所の変更など同窓会への連絡は"郵便で"下記までお送りください。
〒152-0023 目黒区八雲1-1-2
東京都立桜修館中等教育学校　内
東京都立大学附属高等学校同窓会

yagumokai.org　検索

編集委員：内野滋雄（1期）、野口貞義（4期）、徳井　巌（10期）、川田秀文（14期）、瀧野日出雄（　）、新美勝太（58期）、山田健一朗（58期）、加藤恒子（60期）、齋藤春香（60期）、中村　（60期）、伊久見茉優（60期）、木村優花（61期）、鈴木拓海（61期）、末續理紗（61期）、関根　環（61期）